新潟大学建設学科建築学コース
卒業論文梗概集　　平成７年度

新潟市における高齢者の住まい方と住環境に関する調査研究

船津　英人

1 研究目的

わが国の高齢化の早さは、世界にも類をみないものであり、新潟市もその例外ではなく、60歳以上の人口の比率は20%に達そうとしている。

このような現状を鑑み、本研究では、新潟市の各年代層の健常者及び要介護高齢者に対して住生活及び住環境に関するアンケート調査を実施し、高齢者の生活実態を明らかとし、今後の高齢化社会に対応する住環境設計の基礎的資料を蓄積することを目的とする。

2 調査概要

2.1 調査対象：アンケート調査対象と回収率を表１に示す。表２にヒアリングによるアンケート調査対象を示す。

2.2 調査内容：表３にアンケート調査の質問項目と対象を示す。アンケート調査の各項目の質問内容は以下の通りである。⑥～⑨は、60歳以上の高齢者のみに対する設問である。

①**属性：**性別、年齢、家族形態、仕事の有無等。

②**ＱＯＬ(生活の質:QUALITY OF LIFE)：**趣味、友人の有無、生活の張り、生活満足度等。

③**心身の自覚症状：**不眠、食欲不振、疲労感、体の痛み、不安、憂鬱、孤独感等。

④**住宅意識：**騒音、明るさ、通風、設備、広さ、間取り、不便な点、改造した点等。

⑤**生活実態：**生活、着衣、暖冷房設備・期間・時間、設定温度、外出頻度、睡眠時間等。

⑥**ＡＤＬ(日常生活動作能力:ACTIVITIES OF DAILY LIVING)：**着替え、トイレで用を足す、立ち上がる、ご飯を食べる等。

⑦**手段的ＡＤＬ(INSTRUMENTAL ADL)：**電車での外出、食事の用意、預貯金の出し入れ等。

⑧**知的能動性：**新聞・本・雑誌等を読むか、健康への関心、手紙を書くか等。

⑨**居住意識：**現在の住居、居住施設への希望等。

2.3 調査方法：各住戸に対し、アンケート調査票を配布・留置し、一週間後に回収を行った。高齢者施設では、ヒアリングによるアンケート調査を実施した。

3 調査結果

有効回答のみに対して分析を行う。

3.1 属性：図１に調査対象の年齢層を示す。年齢層は60歳代が約20%、70歳代が約30%であり、60歳以上が全体の60%を超える。

3.2 ＱＯＬ（生活の質）：図２にＱＯＬの調査結果を示す。サークル・クラブや町内の集まりには約40%が参加すると回答しており、「親友がいる」に対しては約70%がいると回答している。また、現在の生活に張りがある・満足しているという回答は80%前後である。図３にＱＯＬの代表的指標として生活に対する満足感（Ｑ24）と年層のクロス集計結果を示す。現在の生活に満足している人の割合は、60歳未満が約50%であるのに対して60歳以上は80%を超える。

表１　アンケート調査対象と回収率

調査対象住戸	配布戸数	回収戸数	回収率(%)	回収部数
新石山団地	27	20	67	30
石山団地	61	36	59	49
小針第一団地	48	26	54	41
早川ｼﾙﾊﾞｰﾊｳｼﾞﾝｸﾞ	37	23	62	27
寺地南住宅団地	67	53	79	88
小計	240	158	66	235

表２　ヒアリングによるアンケート調査対象

調査対象施設	施設区分	調査数
なぎさ荘	老人憩いの家	75
その他		153
松鶴荘	養護老人ホーム	50
有明ハイツA	軽費老人ホーム	9
有明ハイツB		8
小	計	295

表３　アンケート調査質問項目とその対象

対象	各年代層の市民	６０歳以上の高齢者
質問項目	①属性 ②ＱＯＬ（生活の質） ③心身の自覚症状（体調） ④住宅意識 ⑤生活実態	①属性 ②ＱＯＬ（生活の質） ③心身の自覚症状（体調） ④住宅意識 ⑤生活実態 ⑥ＡＤＬ（日常生活動作能力） ⑦手段的ＡＤＬ ⑧知的能動性 ⑨居住意識

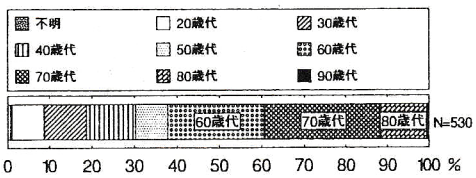

図１　調査対象の年齢層

3.3 住宅意識：図４に住宅設備の調査結果を示す。住宅内で不便と感じる点があるという回答は約25％である。風呂・トイレの設備に対して不満な点があるという回答が約20％、暖冷房設備に対しては約10％である。結露が生じるという回答は約30％である。

3.4 知的能動性：図５に知的能動性の調査結果を示す。新聞を読むと回答した人は約85％である。図６に知的能動性の代表的指標として新聞を読む頻度（Q59）と年層のクロス集計結果を示す。60歳代は約10％、70歳代は約15％、80歳代は約30％がほとんど読まないと回答し、加齢とともに新聞を読まなくなる傾向が見られる。

3.5 居住意識：図７に居住希望先を示す。「かわりたくない」が約80％と最も多い。図８に生活形態別居住希望先を示す。戸建・集合住宅の居住者は約80％、老人ホーム入寮者は約90％が「かわりたくない」と回答している。図９に年層と居住希望先のクロス集計結果を示す。90歳代を除き(注1)、60・70・80歳代では「かわりたくない」が80％前後、「自宅」が10％前後であり、年齢による差違は見られない。

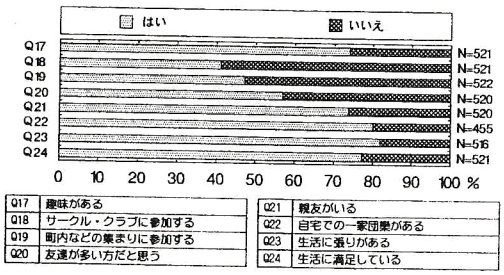

図２　ＱＯＬ（生活の質）

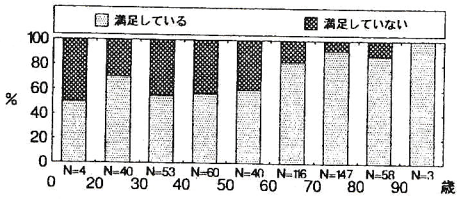

図３　Q24と年層のクロス集計結果

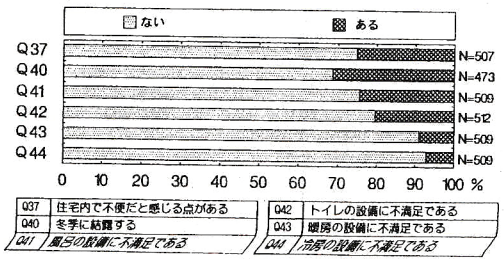

図４　住宅設備に対する不満

4 まとめ

①60歳以上の年層は、60歳未満の高齢者に比べて生活に満足している割合が高い。②住宅設備は風呂・トイレに対する不満が多く、暖冷房に対する不満は少ない。③新聞を読む頻度は加齢とともに減少する。④居住希望先は「かわりたくない」が最も多く、90歳代を除くと大きな差違は見られない。その要因として、年齢よりも自立か要介護かの生活形態の相違が大きいと推察される。

（注１）90歳代の回答者は３人であり、統計上有意とは判断できないために除外した。

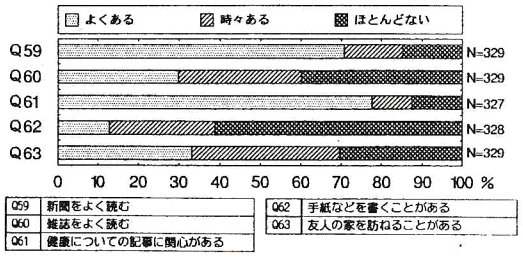

図５　知的能動性

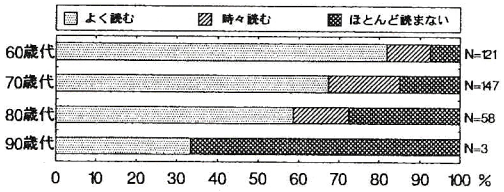

図６　Q59と年層のクロス集計結果

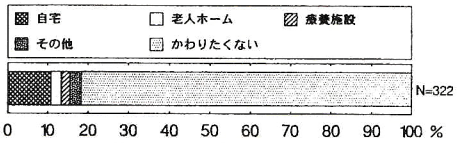

図７　居住希望先

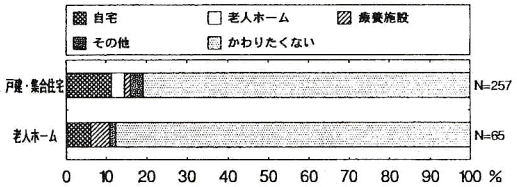

図８　生活形態別居住希望先

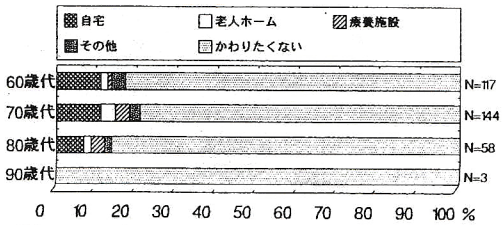

図９　居住希望先と年層のクロス集計結果

指導教官：赤林伸一　助教授